

庄内協同ファームだより

No.147 2013年9月号



発行/

〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
<http://www.shonafarm.com>



だだちや豆(枝豆)は鶴岡の特産品で、栽培している人が多く、市や農協でも推奨している野菜の一つで、私も栽培してから15年位なります。当初は栽培技術も確立しておらず、個々工夫しての栽培方法でしたが、最近ではマニュアル化し、おおよそ誰でも栽培できる野菜となり、栽培者も増えています。私たちも有機栽培で品質の高いものをどうしたら栽培できるか、専門講師を頼んで皆で検討、実践しています。

ところで、今年は異常過ぎる天候で4月雨の日が

多く圃場が乾燥しないまま枝豆栽培がスタートしました。5月末からは逆に少雨に悩まされ畑に植え付けた苗が枯れるなどしました。

その反動か7月に入ると雨の日が一ヶ月続き生育が停滞、

ようやく8月3日には梅雨明け宣言されましたが、そ

の後も雨交じりの不順な天気が続いています。そんな中、枝豆は平年並みの収穫開始となり今は枝豆の収穫作業で大忙し、朝5時起床その日の段取りを済ませ、少し早めに朝食をとり、7時頃から圃場で枝豆の収穫を開始、朝露に濡れている枝豆は新鮮そのもの、枝豆を傷つけないように丁寧に収穫。圃場から持ち帰った枝豆を脱さや機械で枝からさやを外します。洗浄、ふるいにかけた後、人の手による良い枝豆と商品にならない枝豆の選別を行います。有機栽培のため平年は虫害、病害が多く、一般栽培の物と比べると極端に歩留まりが落ちますが、今年は今のところ虫害が少ないようです。収穫が始まつたばかり、終了する9月中旬まであとわずか、炎天下の作業なので熱中症などに気をつけて、作業にかかりたいと思っています。



家族で庄内浜ツアーアー

「庄内の海、山、太陽のもと ミネラルを吸収しよう!!」

福島の取引先生協さんが企画する「家族で庄内浜ツアーアー」のお手伝いをさせて頂きました。32家族101人と多くの皆さんのが庄内を訪ね2泊3日の日程で由良海水浴場の海水浴を中心に加茂水族館、羽黒山観光や枝豆の収穫体験等を楽しみました。

今年は雨の日が多く、この3日間の天気予報も雨で、しかも短時間ではありました。初日の昼前に雷を伴う雨が降り「大丈夫?」と思われる空模様だったのですが、皆さんのが海に着く頃には「ピタッ」と雨が止み3日間1度も雨に降られる事はありませんでした。「福島の皆さんのが天に通じた」と思わずにはいられません。

バスの中で既に着替えをしていた子供達は大人達がテントを立てたりして準備している間にも浮き袋を抱えながら水辺で海に入っていいですか?」と何度も聞いてきて「いいよ!」と言われ



た瞬間に海に入り、はしゃいでいました。去年も同じ企画がありお手伝いさせて頂きましたが、今回は小さい子供が多く1才未満の赤ちゃんから高校生位までの子供達は、なんの気兼ねもなく思いっきり、海水浴が出来たと満足した様子でした。お母さん達もいつも気にしていることを気に掛けずいられ、のんびり子供達が遊んでいる様子を見ていました。特に小さい子供のお父さんお母さんから「今日は家の子の海水浴デビューなんです!」と嬉しそう話していて3人で砂遊びや海で泳いでいる姿を見ていると、こちらまで微笑ましく思いました。

交流会では福島の現状の話があり内部被爆や農産物の放射線量等を計る為のホールボディカウンターの導入や勉強会の開催等いろいろ努力していると感じました。原発の廃炉に向けた処理は遅々として進まず長い年月が必要と思われ仮設住宅に住んでいる避難区域の人達は地域に戻る事を諦め離れていく人が増えていて特に若い人にその傾向が強いそうです。福島で生活する事も地域を離れ生活する事も、どちらも相当の覚悟が必要で向き合って行かなければならない問題が多いと感じました。

しかし福島の皆さんのが笑顔をみるとそのような事は微塵も感じず楽しい交流ができ、強さを感じました。

普段の生活を離れ、庄内を思いっきり楽しんでフレッシュ出来たのではないかでしょうか。

その後はまた雨の日が続きました。(笑)

また来年来て下さいね! 待っています! (今野裕之)

パルシステム埼玉職員研修



7月にパルシステム埼玉の職員のみなさんをお迎えし、研修会が行われました。庄内産直ネットワークとして、会長の大瀧慶一さんははじめAさんよりご協力いただき、交流を深めながら

全日程を終了することが出来ました。また、今年は庄内協同ファームの主管もあり、組合員のみなさんからの多くの参加、ご協力をいただきました。

一日目は昼から水田農業試験場でつや姫の学習会、つづいて小野寺仁志さんの圃場で、田んぼの生き物調査を行い、みんなで図鑑を片手にわきあいあいと生き物の観察をしました。雨が降り続き、生き物調査は出来ないのではないかと思われましたが、ちょうど田んぼに入っている間は降ることなく終えることができて幸いでした。夜の交流会では自己紹介を兼ねた参加者全員のお話を聞きながら、おおいに盛り上がりました。

一夜明け、前日のお酒もすぐにぬけてしまうような予定外の研

修が待っていました。最初にA横山倉庫施設を見学した後、向かった先は廣井嘉治さんのさくらんぼ農園。収穫体験もその場で食べながらパックに詰め放題、楽しい一時を体験させていただいた廣井さんにみなさん感謝の気持ちでいっぱいでした。続いて酒田の山居倉庫を見学し、近くで昼食をとりました。こちらでもご飯の食べ放題で、おいしい庄内米にみなさん大変満足の様子でした。

最後に庄内空港までお送りし、職員のみなさんは帰路につきました。二日間の研修、交流で更に埼玉と庄内の距離は近くなったのではないかと感じています。

また来年もお待ちしております。

(山口秀明)



商
品
紹
介

庄内協同ファーム 安全で美味しい お米

のどか俱楽部

へちまよ水



生産者
阿部正雄

が心配されるところです。毎年のように続く異常気象、天候に大きく左右される農業にとっては、対応に苦慮するところですが、今年も安全で美味しいお米を皆様の元へお届けできるよう頑張っています。

今年は、天候の変化が非常に激しく、6月はほとんど雨が降らず、7月は一転して雨続きといった状況になりました。今までに経験したことのない大雨になつたり、土砂崩れや河川の氾濫があつたり、農作物（特に畑作物）にも影響が出ています。幸いお米の方には今のところあまり影響が見られないものの、今後の天候次第では、いもいち病等の病気の発生が心配されるところです。毎年のように続く異常気象、天候に大きく左右される農業にとっては、対応に苦慮するところですが、今年も安全で美味しいお米を皆様の元へお届けできるよう頑張っています。

今年は、異常気象で予想を超える豪雨の中、多くの作物に影響が出ておりますが、へちまは、割と被害を受けずに成長しております。十五センチほどもある大きな黄色の花が風に揺れ、早い圃場ではへちまの実も大きくなつきました。

九月中旬には、へちま水の採水作業が始まります。

庄内協同ファームでは、つや姫、ひとめぼれ、コシヒカリを中心として、有機栽培や減農薬、無肥料で栽培し、安全で美味しいお米の生産に努力しています。

今年は、天候の変化が非常に激しく、6月はほとんど雨が降らず、7月は一転して雨続きといった状況になりました。今までに経験したことのない大雨になつたり、土砂崩れや河川の氾濫があつたり、農作物（特に畑作物）にも影響が出ています。幸いお米の方には今のところあまり影響が見られないものの、今後の天候次第では、いもいち病等の病気の発生

「のどか俱楽部」のへちま水は、有機栽培のへちまから採取されたへちま水を使った無添加の化粧水です。



((((米部会除草機圃場視察研修に行って)))

7月8日、あいにくの雨の中9名の参加者が自動車3台に乗合せて宮城県へと向かった。目的は30町歩もの面積を乗用除草機だけで除草しているという水稻圃場の視察だ。実践している黒澤重雄さんの御宅まではファームから車で3時間半ほどの道のりである。お昼を食べて黒澤さん宅に到着すると、黒澤さんと息子さんが迎えてくれた。座敷で机を囲みながら、乗用除草機での無農薬無肥料栽培のコツを丁寧に説明してくれた。大切なのは収穫後の耕起のことだった。稻刈り後すぐと12月、そして真冬の2月、春までに3回耕起することで草が生えづらくなり、藁の腐熟も進むらしい。太平洋側と日本海側の天気の違いもあり、田が乾かない庄内で実践できるかはわからないが大きなアドバイスである。苦労しながら辿り着いた農法を惜しげもなく公開してくれる腹の大きさに感動した。また、作業を写したアルバムを見せてもらったが、除草機に乗る息子さんは半袖Tシャツに短パン、サンダル履きで、まるでビーチにでも行くような姿だった。私たちの常識を超えていた。その彼からタイミングよく「既存の常識に捉われずに自分で考え実践しないと…。」との言葉を貰った。その後、実際に圃場に行って更に驚いた。か

なりの粗植である。8条植えの中で2条分抜いてある。雑草は全くない。土に手を入れてみると藁も完全に分解している。そして、無肥料なのに稻の草丈も葉色も茎数も茎の太さも素晴らしい。九俵以上は穫れそうだ。凄い!! 参加者みんなが驚いた圃場視察であった。今年は庄内協同ファームでも乗用除草機を導入した。

これから楽しく疲れない無農薬栽培をしていきたい。

(富樫俊悦)



ペンリレー

従然草

今野昭史

あとがき



今年の夏も終わった。

ここ山形庄内では梅雨が8月に入つてから明けた為か、いわゆる真夏が短く思えた。

毎年思うのだが、歳を取れば取るほど、月日の流れを早く感じる。

大人になつたら皆が同様に思うのだろうか。子供の頃は、時間が過ぎるのが長く感じられた。遊んでいる時はそうでもないのだが、例えは何か楽しいイベントがあると、それが待ち遠しかつたものだ。夏のイベントといえば、海にプール、キャンプ、花火大会、盆踊り。夏休みということもあり宿題以外は常にウキウキ気分だった。夏休みの最後は決まってたまつた宿題の処理に四苦八苦。終わつてしまえば早かつたなあと思うのだが、今の大人の自分が長く感つた。

今自分はアラフォー一真っ只中。いつの間にか5人の子供の父親になつた。今年の夏は家族全員で海には行けなかつた。5人目の子供が今年の春に生まれたこともあり、全員で行くことが難しいと思つたからだ。イベントといえば「赤川花火大会」くらいなもの



これから味覚の秋になり、涼しくとも過ごしやすい季節になるが、子供の頃の秋の思い出として強烈に脳裏に残つてゐるものがある。それは真っ青に澄んだ秋の空だ。自分が子供の頃の稻刈りはコンバイン

「働く農機具」

だつさやき

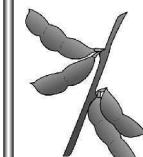
脱莢機

枝豆の莢を枝からもぎ取る機械です。

チェーンに枝を挟んで自動的に送り込み、ゴムの板を取り付けた



回転する二つの円筒の隙間を通らせ、莢を取ります。同時に風で葉を飛ばす仕組みですが、その後は人間の目で不良品を取り除きます。



だつたが、今のフレコンやタンクに入れる方式とは違つて、30kg程の麻袋に入れてそれをトラックに積んで運ぶというやり方だつた。親父が稲刈りをして麻袋がいっぱいになる間、自分はトラックに積んだ麻袋の上に寝転がり、空を見ていた。どこまでも青く澄んだ空に自分も吸い込まれるような感覚を覚えたものだ。時間にすれば長くもないのだが、自分にはその時間が永遠にも思えた。大人になつた自分が今もそのような感覚で空を見るのはわからない。子供の感覚でしか見れないのかもしれないが、でも自分の子供たちにはぜひ見て感じてほしい。今年の秋は子供たちを連れてその空を探しに出かけたいと思う。

六波羅蜜とは、次の六つのことです。

- ・布施 財施 財を施す、法施 心理を教える、無畏施 恐怖を取り除き安心を与えるなど、見返りを求めて施す。
- ・持戒
- ・忍辱
- ・精進
- ・禪定
- ・智慧 真実を見抜く力を身につける

つまり、日常の生活に追われ、自分自身を見つめることができない人でも、春と秋の七日間は六波羅蜜という良い行いをし、先祖や仏様に感謝しますようということです。

「暑さ寒さも彼岸まで」というように、日本のお彼岸は季節感をダイレクトに感じることの出来る行事ともいえます。その昔、農耕生活をしていた頃は太陽を崇拜していたので、彼岸を季節のシンボルとして五穀豊穣を願っていました。春の頃には豊作を願い、秋の頃には収穫に感謝するという自然信仰と仏教の教えなどが結びつき、千年以上にわたって日本人の生活中に「お彼岸」が定着しているのです。

春は牡丹にちなん^てばたもち、秋は萩にちなん^ておはぎ』だということ知つてましたか?

お彼岸は聖徳太子の時代から千年以上も日本に息づく行事です。「彼岸」を言葉であらわすと、あちの世界のこと。その反対にうちの世界を、此岸しがん」というのを存知でしたか?

彼岸も此岸も仏教用語で、迷いや煩惱に満ち溢れた「うちの世界」此岸から、悟りを得たあちの世界である「彼岸」へ到達するため、春分・秋分の日を中日とする前後七日間は、六波羅蜜ろくはらみつという修行に励みます。

運ぶというやり方だつた。親父が稲

刈りをして麻袋がいっぱいになる間、自分はトラックに積んだ麻袋の上に寝転がり、空を見ていた。どこまでも青く澄んだ空に自分も吸い込まれるような感覚を覚えたものだ。時間にすれば長くもないのだが、自分にはその時間が永遠にも思えた。大人になつた自分が今もそのような感覚で空を見るのはわからない。子供の感覚でしか見れないのかもしれないが、でも自分の子供たちにはぜひ見て感じてほしい。今年の秋は子供たちを連れてその空を探しに出かけたいと思う。

六波羅蜜とは、次の六つのことです。

- ・布施 財施 財を施す、法施 心理を教える、無畏施 恐怖を取り除き安心を与えるなど、見返りを求めて施す。
- ・持戒
- ・忍辱
- ・精進
- ・禪定
- ・智慧 真実を見抜く力を身につける

つまり、日常の生活に追われ、自分自身を見つめることができない人でも、春と秋の七日間は六波羅蜜という良い行いをし、先祖や仏様に感謝しますようということです。

「暑さ寒さも彼岸まで」というように、日本のお彼岸は季節感をダイレクトに感じることの出来る行事ともいえます。その昔、農耕生活をしていた頃は太陽を崇拜していたので、彼岸を季節のシンボルとして五穀豊穣を願っていました。春の頃には豊作を願い、秋の頃には収穫に感謝するという自然信仰と仏教の教えなどが結びつき、千年以上にわたって日本人の生活中に「お彼岸」が定着しているのです。

春は牡丹にちなん^てばたもち、秋は萩にちなん^ておはぎ』だということ知つてましたか?